中学校外国語科における授業づくりについての一考察
ーSmall Talk と複数の領域を統合した言語活動の指導を通してー
A Study of Foreign Language Education at Junior High Schools in Japan

研　修　課　指導主事　上　山　巳歩里　UEYAMA, Mihori
研　修　課　指導主事　榎　本　三紀子　ENOMOTO, Mikiko
学校支援課　指導主事　岡　　久美子　OKA, Kumiko

【要旨】　2021 年度から中学校において学習指導要領（平成 29 年告示）が全面実施となる。今回の改訂では，外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組が引き続き重視されている。また，「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや，「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分でないこと，読んだことについて意見を述べ合うなど，複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題が挙げられている。和歌山県教育センター学びの丘（以下，当センターと略記）では，これらの課題に対応するため，中学校外国語科教員による研究会を発足させ，学習指導要領（平成 29 年告示）で更に求められる言語活動の充実，特に Small Talk と複数の領域を統合した言語活動の指導について研究した。

【キーワード】　中学校外国語科，学習指導要領（平成 29 年告示），言語活動の充実，
やり取り，即興性，Small Talk，複数の領域を統合した言語活動

Abstract: The new Courses of Study for elementary schools, junior high schools, high schools and schools for special needs education were announced. The new education system in junior high schools formally begins from April 2021. Upon this transition, developing actual communication skills using foreign language (namely, English) has been continueously put importance on. In the new Courses of Study, some problems surrounding English Education in Japan have been particulary pointed out: Speaking and Writing activities seem to be rather underrated, Speaking Interaction and real life conversation situations are not included enough, the activities to use Integrated-Skills, such as speaking your opinion based on what you had read, are not efficiently carried out. To deal with these tasks, Wakayama Prefectural Educational Center Manabi-no-Oka formed a research group for Foreign Language Education at junior high schools. By working with group members, we propose the methods for enhancing lessons, particulary Small Talk Activities and Integrated-Skills Activities in class.

研究協力者

田辺市立東陽中学校	西野　勝貴	田辺市立高雄中学校	佐藤　聡子
田辺市立新庄中学校	小嶋　亜依	田辺市立上芳養中学校	渡口　奈都希
田辺市立上秋津中学校	榎本　亜紀子	田辺市立衣笠中学校	田中　利依
田辺市立中辺路中学校	垣坂　卓哉	田辺市立大塔中学校	藤田　万愉子
和歌山県外国語指導講師	Benjamin Stannard		

１　研究の背景と目的

学習指導要領（平成 29 年告示）が改訂され，中学校では令和３年度から全面実施となる。今回の改訂では，予測が困難な時代の中で，子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を確実に育成することをめざしている。

加えて，グローバル化が急速に進展する中で，外国語によるコミュニケーション能力が生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され，外国語科では，特に次の点が大きな課題として述べられている。

> 授業では依然として，文法・語彙等の知識がどれだけ身に付いたかという点に重点が置かれ，外国語によるコミュニケーション能力の育成を意識した取組，特に「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動が適切に行われていないことや「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動が十分ではないこと，読んだことについて意見を述べ合うなど，複数の領域を統合した言語活動が十分に行われていないことなどの課題がある。また，生徒の英語力の面では，習得した知識や経験を生かし，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現することなどに課題がある。

（※１　下線筆者）

これらの課題解決に向け，中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語編（以下，学習指導要領解説と略記）では，改訂の趣旨として次の４点が挙げられている。

① 目標の改善
② 内容構成の改善
③ 内容の改善・充実
④ 学習指導の改善・充実（※２）

①については，外国語科の目標として，「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ，外国語による聞くこと，読むこと，話すこと，書くことの言語活動を通して，簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」（※３）を育成することが示されており，言語活動は資質・能力を育成する要となるものであることが分かる。

また，③については，「関心のある事柄から日常的な話題や社会的な話題まで取り上げ，そういった事柄や話題について，一層幅広いコミュニケーションを図ることができるようにするため，内容においては，互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視するとともに，具体的な課題等を設定するなどして学習した語彙や表現等を実際に活用する活動を充実させ，言語活動の実質化を図っている。」（※４）と述べられている。

これまでの外国語科の授業では，言語活動として，言語材料についての知識や理解を深めるものや，自分の考えや気持ちなどを伝え合うものが行われてきた。前者については，指導事項の基礎となる技能を身に付けさせる言語活動として十分機能してきたが，コミュニケーションを行う目的や場面，状況等に応じて自分の考えや気持ちを表現できる生徒を育成していくためには，後者のような対話的な言語活動の充実が求められる。

学習指導要領（平成 29 年告示）解説総則編では，確かな学力の育成に当たっては，特に重要となる学習活動として，「生徒の言語活動など，学習の基盤をつくる活動を充実する」（※５）ことが示されている。このことからも，言語能力の確実な育成と，各教科等の目標を実現するための手立てとして，言語活動の充実が求められていることが分かる。

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査結果においても，学習指導要領で述べられているものと同様の課題（図１）が見られるため，学習指導の改善・充実が求められている。

【受容的な技能(聞くこと，読むこと)について】 ◇　話されたり書かれたりしている内容そのものを理解することは，おおむねできていると考えられる。 ◆　一方で，その内容から目的・場面・状況に応じて，概要や要点をとらえることに課題がある。
【発信的な技能(書くこと，話すこと)について】 ◇　書くこと，話すことのどちらにおいても，問われていることが分かれば，自分の考えなどをなんとか伝えようとする粘り強さや意欲が見られる。 ◆　書くことについては，基本的な語や文法事項等の知識の定着やそれらを活用することに課題がある。 ◆　話すことについては，全体的に課題は多い。 ◆　特に情報や考えなどを即興でやり取りすることに課題がある。
◇・・・比較的できている点　◆・・・課題のある点

図１　中学校英語における課題等（※６）
（一部抜粋して整理）

本稿は，課題のうち，特に「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動，複数の領域を統合した言語活動に着目し，これらの言語活動の充実と学習指導の改善を図るものとする。

２　言語活動の充実と学習指導の改善に向けて

当センターでは，学習指導要領の全面実施に向け，中学校外国語科授業研究会を発足させ，当センター近隣中学校外国語科教員８名を協力教員とした。

主な研究内容は，「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動の一方策としてSmall Talk，そして複数の領域を統合した言語活動について取り組んだ。

（１）Small Talk の指導

ア　Small Talk とは

小学校外国語活動・外国語研修ガイドブックによると，Small Talk とは，「２時間に１回程度，帯活動で，あるテーマのもと，指導者のまとまった話を聞いたり，ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすること」（※７）と示されている。

山田（2018）は，Small Talk における指導の効果を高める手立てとして，既習表現を想起させるために必要な過程（図２）を示している。

見通しをもつ
↓
まずやってみる
↓
想起する（言えなかったことを表現するために必要な
↓　英語表現を想起する）
意識して使う（想起した英語表現を意識して使う）

図２　既習表現を想起させるために必要な過程（※８）

文部科学省が作成した「中学校外国語科の移行期間における指導資料」では，

① Interactive Teacher Talk
② S-S Interaction 1
③ Sharing
④ S-S Interaction 2（※９）
（S は Student を示す）

と示されており，指導の過程をイメージすることができる。また，指導上の留意点をまとめると，次のようになる。

① Interactive Teacher Talk
　指導者と生徒による簡単なやり取りを通して，話題や言い出し方を提供する。
② S-S Interaction 1
　生徒同士でやり取りをさせる。
③ Sharing
　伝えたいことを伝えることができるよう，既習表現を想起させる。
④ S-S Interaction 2
　相手を変えてもう一度生徒同士でやり取りをさせ，既習表現を活用させる。

特に③Sharing では，図３のいずれかを計画的に行うことが示されている。

●キーワード等の使用
　使用させたい言語材料を使用できたかどうかを確認する。
　例：What is a first question?
　（出だしの質問の確認）
●パラフレーズ（既習表現の想起）
　英語で何と言えばよいか分からず困ったことを聞き出し，既習表現でどのように言い換えるとよいかを全員に考えさせる。
●対話の継続
　反応の言葉（Me, too. I think so, too.等）や関連した質問など，対話を継続させるために必要な英語の使用を促したり，使用していた生徒を紹介して広めたりする。

図３　Sharing の留意点（※10）

Small Talk を通して，生徒は思考・判断を繰り返しながら自分の考えや気持ちを表現することが期待できる。ただし，話すことや書くことといった発信力の変化はすぐには現れにくいため，指導者は長期にわたって指導したり見届けたりすることに留意する必要がある。本学習活動を継続して行っていくためにも，生徒が楽しく対話できるようにするなど，明るい雰囲気で活動を終えられるようにすることに留意することも必要である。

また，和泉(2018)は，双方向のやり取りについて，次のように述べている。

人は話す力を身につける際に，「発表力」を先に身につけるだろうか，それとも，「やり取りの力」を先に身につけるだろうか。母語習得や自然な第二言語習得を考えると，やり取りが先に来ることがわかるだろう。相手とのやり取りの中でさまざまな助けを得ながら，徐々に自分のことが話せるようになっていき，最終的に１人でまとまったことを発表できる力がついていくのが自然な姿である。
（中略）
実際の生徒の英語学習の様子をつぶさに観察してみても，双方向のやり取りを通して，徐々に他者に頼らないで独力で長い文を言えるようになっていく学習過程を見ることができる。（※11）

ロング(1996)により提案された「インタラクション仮説」では，第二言語習得の基

本はインプットとしながら，これに加えて対話を行うことで，言語理解が促進されるとしている。本仮説によると，対話において，学習者が分からないことを聞き返したり，内容を確認したりすることで，初めは分からなかったことが理解できるようになり，言語習得が進んでいくとされている。

これまでの授業では，生徒が話す内容を事前に書き，読む練習をしてから発表するといった発表形式のものがよく見られた。また，やり取りの形式であったとしても，生徒があらかじめ示された発話例を読むことで，やり取りを成立させているものも多く見られた。

実際のコミュニケーションで求められる即興性は，先に準備してから話すのではなく，その場でやり取りをすることで養われていく。文法の説明後に言語活動を行う演繹的な指導に偏らず，言語活動を通して文法への気付きを促す帰納的な指導を行うという観点からも，実際のコミュニケーションの中で英語力を身に付けていく授業づくりに取り組む必要がある。

イ　Small Talk の実践例

本研究会では，話すこと［やり取り］の能力を少しずつ身に付けることができるように，Small Talk を２時間に１回程度，協力教員の所属中学校にて実施した。授業の帯活動として位置付けて，既習表現を繰り返し使用する機会を保障することで定着を図った。

具体的な指導方法については，文部科学省が作成した「中学校外国語科の移行期間における指導資料」にある年間指導計画や各時間の展開案を参考にした。本研究会では，これらを基に指導方法を模擬的に示し，より明確な指導のイメージを共有した上で実践できるようにした。**図４**に，本研究会で作成した実践例を示す。

やり取りに当たっては，会話を継続・発展させるため，学習指導要領解説にある「会話を継続・発展させるために必要なこと」（**図５**）を参考にした。このことについては，「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」でも，「対話を続けるための基本的な表現例」（**図６**）として同じようなことが示されている。これらを意識することは，小中一貫した指導を行うことにもつながる。

トピック：**誕生日**
言語材料：want to ～
発 話 例：I want to ～.
What do you want to ～?

① Interactive Teacher Talk

T: What do you want to do on your birthday?
I want to eat big hamburgers and some delicious cake on my birthday.
I want to go to the amusement park.
I want to ride exciting roller coasters.

T: What do you want to do on your birthday?
S1: I want to eat delicious food on my birthday.
T: What do you want to eat?
S1: I want to eat delicious fried chicken.
T: That's good.
Where do you want to go?
S1: I want to go to the zoo and see animals.

② S-S Interaction 1

S2: What do you want to do on your birthday?
S3: I want to eat some cake.
S2: That's nice.
What is your favorite cake?
S3: I like chocolate cake.
S2: Oh, you like chocolate. I like it, too.
S3: What do you want to do on your birthday?
S2: I want to go to my favorite restaurant.

図４　Small Talk **実践例**

①**相手に聞き返したり確かめたりする**
（Pardon? / You mean..., right? **など**）
②**相づちを打ったり，つなぎ言葉を用いたりする**
（I see. / Really? / That's nice. **など**）
③**相手の答えを受けて，自分のことを伝える**
（I like baseball, too. **など**）
④**相手の答えや自分のことについて伝えたことに「関連する質問」を付け加える**
（What kind of Japanese food do you like? / How about you? **など**）

図５　会話を継続・発展させるために必要なこと（※12）

対話の開始	対話の始めの挨拶 Hello. / How are you? / I'm good. How are you? など
繰り返し	相手の話した内容の中心となる語や文を繰り返して確かめること 相手：I went to Tokyo. 自分：(You went to) Tokyo. など
一言感想	相手の話した内容に対して自分の感想を簡単に述べ，内容を理解していることを伝えること That's good. / That's nice. / Really? / That sounds good. など
確かめ	相手の話した内容が聞き取れなかった場合に再度の発話を促すこと Pardon? / Once more, please. など
さらに質問	相手の話した内容についてより詳しく知るために，内容に関わる質問をすること 相手：I like fruits. 自分：What fruits do you like? など
対話の終了	対話の終わりの挨拶 Nice talking to you. / You, too. など

図６　対話を続けるための基本的な表現例（※13）

（２）複数の領域を統合した言語活動の指導

ア　複数の領域を統合した言語活動とは

高等学校学習指導要領（平成 30 年度告示）解説外国語編英語編では，統合的な言語活動について次のように示されている。

> 統合的な言語活動とは，「聞くこと」，「読むこと」，「話すこと［やり取り］」，「話すこと［発表］」，「書くこと」の複数の領域を結び付けて統合した言語活動のことであり，中学校の外国語科においても，複数の領域を関連付ける統合的な言語活動を視野に入れた目標が設定されている。（※14）

実際に，中学校の各領域における指導事項として，**図７**のような統合的な言語活動が示されている。これらの指導事項から，単に活動をして終わるのではなく，領域間の統合的な言語活動が求められていることが分かる。

とりわけ，「聞くこと」においては，「この事項では，『理解した』とはどのような状態のことであるかを改めて示している。つまり，聞いた内容を話したり書いたりして説明することができる段階まで至ることを『理解した』状態であると考えることもできる。」（※15）と示されている。このように，生徒が学習した内容を実際に使用することで，より一層理解が促進され，定着を図ることができると考えられる。また，言語活動において，既得の知識や経験と新たに得られた知識を活用することで，「思考力，判断力，表現力等」の育成が期待できる。

聞くこと エ　友達や家族，学校生活などの日常的な話題や社会的な話題に関する会話や説明などを聞いて，概要や要点を把握する活動。また，その内容を英語で説明する活動。
読むこと エ　簡単な語句や文で書かれた社会的な話題に関する説明などを読んで，イラストや写真，図表なども参考にしながら，要点を把握する活動。また，その内容に対する賛否や自分の考えを述べる活動。
話すこと［やり取り］ ウ　社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき，読み取ったことや感じたこと，考えたことなどを伝えた上で，相手からの質問に対して適切に応答したり自ら質問し返したりする活動。
話すこと［発表］ ウ　社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき，自分で作成したメモなどを活用しながら口頭で要約したり，自分の考えや気持ちなどを話したりする活動。
書くこと エ　社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことから把握した内容に基づき，自分の考えや気持ち，その理由などを書く活動。

図７　各領域における指導事項（※16　下線筆者）

イ　複数の領域を統合した言語活動の実践例

本研究会の協力教員が所属している地域で使用する教科書（東京書籍）教材を基に，複数の領域を統合した言語活動を行った。言語活動の設定に当たっては，前述の**図７**に示した言語活動を参考にした。本研究会で作成した実践例を**図８**，**図９**に示す。

図８の**指導例①**では，友達へのインタビューで聞いたことを基に，本時で身に付け

単元名	NEW HORIZON English Course 3 Unit 6-2 Striving for a Better World
目　標	人について詳しい情報を加えて説明することができる。
学　習　活　動	
1	友達にインタビューする。 S1：Ami, what sport do you like? S2：I like tennis. S1：Oh, that's good. Do you play tennis every day? S2：No, I play tennis every weekend.
2	インタビューしたことを基に，書く。 Ami is my friend who likes tennis. She plays tennis every weekend. （B 基準） I don't play tennis a lot, but I want to play it with Ami next time. （A 基準）

図８　複数の領域を統合した言語活動
指導例①【聞いたことを基に，書く】

させたい新出表現である関係代名詞 who を実際に使用させる。新出表現は，現段階の学習者にとっては少し難しいと感じるものであるため，題材については学習者が日頃からよく知っている人物を扱っている。この新出表現に，既習表現を活用して自分の考えや気持ちを付け加えることにより，「思考力，判断力，表現力等」の更なる育成を図ることができると考える。

単元名	NEW HORIZON English Course 2 Unit 3-4 Career Day
目　標	レポートを読んで，その内容を理解することができる。
学　習　活　動	
1	職業体験についてのレポートを読み，内容を理解する。 〈Reading Point〉 ☆ 筆者の将来の夢は何か。 ☆ 外国でサッカー選手としてやっていくために必要なことは何か。
2	読んだことを基に，話し合う。 Q1：Why are teammates important? Q2：Why are classmates important?

図９　複数の領域を統合した言語活動
指導例②【読んだことを基に，話す［やり取り］】

図９の指導例②では，内容理解を深めるために，学習者に身近で，答えが必ずしも１つに定まらない質問を設定し，やり取りを行う。これにより，学習者は本文の内容を自分事として考えるとともに，既習表現を活用することで，伝えたい内容をどのようにして伝えるか，語や文法にも注意を向けることができる。

さらに，やり取りしたことを基に書く活動を加えると，語や文法等を正しく用いて表現することができたかを，学習者自身が確認し，誤りを修正することが可能となる。また，指導者も学習到達度を確認できるため，正確性の向上を期待することができる。

３　研究を振り返って

研究会では，協力教員の所属中学校計８校の生徒を対象に，Small Talk と，複数の領域を統合した言語活動について，４件法を用いた事後アンケート調査を行った（図10）。なお，質問項目は平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査生徒質問紙の調査項目を参考に作成した。

質問項目１，２は Small Talk について，質問項目３，４は複数の領域を統合した言語活動についての質問である。回答は全て４件法を用いて調査した。図 10 のグラフは，「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」を肯定的な回答，「どちらかと言えば，当てはまらない」「当てはまらない」を否定的な回答として，その割合を示している。

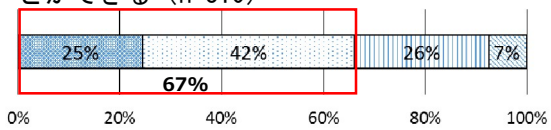
また，各質問の肯定的な回答に対しては，どの活動を通して力が身に付いたと思うか，否定的な回答については，どの活動をすれば力が身に付くと思うかを，次の項目から複数回答可として回答を求めた。

1. 英語で友達や先生などの人の意見を聞くこと
2. 英語の文を読むこと
3. 英語の発音を練習すること
4. 英語で自分の事や意見を言うこと
5. 英語で友達と会話すること
6. 英語で外国人の先生と会話すること
7. 英語で文を書くこと
8. 外国のことについて学ぶこと
9. 日本語と英語の違いを知ること
10. 聞いたことを基に英語で話すこと
11. 読んだことを基に英語で話すこと
12. 聞いたことを基に英語で書くこと
13. 読んだことを基に英語で書くこと
14. その他

アンケート調査結果等を基に，２の項で述べた２つの取組の成果・課題や生徒及び教員の意識の変容について考察する。

Small Talk に関する質問

質問項目１
原稿などを準備することなく，即興で，自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合うことができる（n=310）



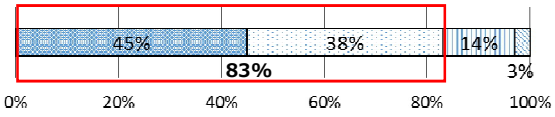
肯定的回答：どの活動を通して力が身に付いたか（複数回答可，上位３項目）

質問項目１について肯定的に回答した生徒　n=205	回答数	割 合
5. 英語で友達と会話すること	146	71%
4. 英語で自分の事や意見を言うこと	143	70%
6. 英語で外国人の先生と会話すること	105	51%

否定的回答：どの活動をすれば力が身に付くと思うか（複数回答可，上位３項目）

質問項目１について否定的に回答した生徒　n=105	回答数	割合
5. 英語で友達と会話すること	69	66%
4. 英語で自分の事や意見を言うこと	50	48%
6. 英語で外国人の先生と会話すること	44	42%

質問項目２
生徒同士のやり取りの中で，習った英語表現を使うことができる（n=310）



肯定的回答：どの活動を通して力が身に付いたか（複数回答可，上位３項目）

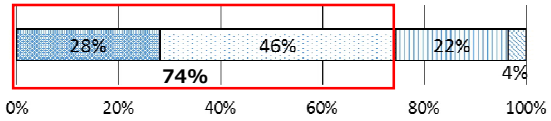
質問項目２について肯定的に回答した生徒　n=258	回答数	割合
5. 英語で友達と会話すること	163	63%
4. 英語で自分の事や意見を言うこと	87	34%
2. 英語の文を読むこと	85	33%

否定的回答：どの活動をすれば力が身に付くと思うか（複数回答可，上位３項目）

質問項目２について否定的に回答した生徒　n=52	回答数	割合
5. 英語で友達と会話すること	25	48%
3. 英語の発音を練習すること	18	35%
2. 英語の文を読むこと	17	33%

複数の領域を統合した言語活動に関する質問

質問項目３
聞いたり読んだりしたことについて，生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりすることができる（n=310）



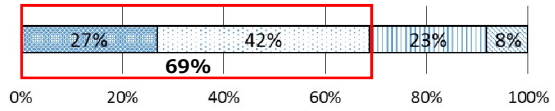
肯定的回答：どの活動を通して力が身に付いたか（複数回答可，上位３項目）

質問項目３について肯定的に回答した生徒　n=231	回答数	割合
5. 英語で友達と会話すること	134	58%
4. 英語で自分の事や意見を言うこと	116	50%
10. 聞いたことを基に英語で話すこと	108	47%

否定的回答：どの活動をすれば力が身に付くと思うか（複数回答可，上位３項目）

質問項目３について否定的に回答した生徒　n=79	回答数	割合
10. 聞いたことを基に英語で話すこと	36	46%
4. 英語で自分の事や意見を言うこと	34	43%
5. 英語で友達と会話すること	34	43%

質問項目４
聞いたり読んだりしたことについて，その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりすることができる（n=310）



肯定的回答：どの活動を通して力が身に付いたか（複数回答可，上位３項目）

質問項目４について肯定的に回答した生徒　n=213	回答数	割合
7. 英語で文を書くこと	132	62%
12. 聞いたことを基に英語で書くこと	130	61%
13. 読んだことを基に英語で書くこと	130	61%

否定的回答：どの活動をすれば力が身に付くと思うか（複数回答可，上位３項目）

質問項目４について否定的に回答した生徒　n=97	回答数	割合
12. 聞いたことを基に英語で書くこと	54	56%
13. 読んだことを基に英語で書くこと	52	54%
7. 英語で文を書くこと	39	40%

当てはまる　どちらかといえば当てはまる　どちらかといえば当てはまらない　当てはまらない

図 10　生徒対象の事後アンケート調査結果

（１）Small Talk

質問項目１「原稿などを準備することなく，即興で，自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合うことができる」について，67％の生徒が肯定的に回答した。また，どの活動を通して力が身に付いたか，どの活動をすれば力が身に付くと思うかについて，集計結果の上位３項目を見てみると，肯定的，否定的ともに**「5. 英語で友達と会話すること」**という項目が最も多かった。肯定的に回答した生徒は，授業で友達と会話することが，即興性の向上につながるという実感を得ていることが分かる。また，否定的に回答した生徒の多くも，英語で友達と会話することに挑戦していくことで，即興的にやり取りする力が身に付くと考えていることがうかがえる。これらのことから，英語で自分の考えや気持ちを伝える機会を設定することの重要性が示唆されたものと考える。

質問項目２「生徒同士のやり取りの中で，習った英語表現を使うことができる」について，肯定的に回答した生徒が 83％にのぼった。本質問項目に関しても，肯定的，否定的ともに**「5. 英語で友達と会話すること」**を選択した生徒が最も多かった。このことから，多くの生徒が，Small Talk 等の活動が既習表現を活用することにつながると感じていることが分かる。

授業における生徒の振り返りでは，Small Talk について次のＡ～Ｃのような特徴的な記述が見られた。

A	・会話する中でリアクションをすることは大切だ。 ・友達のリアクションを見て，色々な反応の仕方を参考にしたいと思った。
B	・積極的に英語を話したり，聞いたりしたので，英語を話すことに少し慣れた。 ・英語で話すことは難しいけれど楽しい。そして英語で友達と話すと，友達との距離が縮まる。
C	・ワークシートを見ずに対話するのは難しいが，もっと話すことに挑戦していきたい。

Ａの記述からは，伝えたいことを一方的に伝えるだけでなく，相手の意見に合わせて反応することで対話を継続・発展させようとする姿勢が見られた。Ｂの記述からは，英語で会話をすることに慣れ，相手の意見を聞いたり，自分の意見や考えを伝えたりすることに楽しさを感じていることがうかがえる。Ｃの記述では，対話的な言語活動に対する意欲の向上が感じられる。

協力教員を対象にした記述による事後アンケート調査でも，Small Talk について，「英語で意見を共有する機会の重要性を改めて実感した。」「生徒がいきいきとした表情で英語を話すようになった。」等の肯定的な回答が見られた。

以上のことから，Small Talk の取組について，生徒が即興的にやり取りする力の重要性，そして有用性に気付き，学習に対する姿勢が前向きに変容したことがうかがえる。よって，Small Talk は考え等を即興でやり取りするための一方策として有効であると言える。

一方で，協力教員からは「指導上の留意点①～④に沿って実施すると時間がかかる。」「即興的にやり取りする力を定着させることは一朝一夕にはいかない。」といった課題も挙げられた。また，**図 11** のように，生徒に対話を続けようとする意識は見られるが，文法や語彙，表現等の誤りにまでは意識が向いていないことが読み取れる。ただ対話することに慣れるだけではなく，伝えたい内容を正確に伝えるためにも，言語材料の確実な定着も課題として挙げられる。

S1：What do you want to do in winter?
S2：I want to read <u>book</u> at home.
S1：That’s nice.
S2：How about you?
S1：I <u>play ski</u>.
S2：Where do you want to ski?
S1：I <u>play ski</u> in Nagano.
S2：That’s nice.

図 11　Small Talk における生徒の発話記録の一部（下線部は誤りを示す。）

（２）複数の領域を統合した言語活動

質問項目３「聞いたり読んだりしたことについて，生徒同士で英語で問答したり意見を述べ合ったりすることができる」について，74％の生徒が肯定的に回答した。肯定的に回答した生徒は**「5. 英語で友達と会話すること」「4. 英語で自分の事や意見を言うこと」「10. 聞いたことを基に英語で話すこと」**を通して，力が身に付いたと感じている。否定的に回答した生徒も，割合は異なるが，同じ項目の活動をすれば力が身に付くと考えている。つまり，得た情報に基づいて英語で会話したり，自分の意見や考えを伝えたりする活動の有用性に気付いていることが分かる。

質問項目４「聞いたり読んだりしたことについて，その内容を英語で書いてまとめたり自分の考えを英語で書いたりすることができる」について，69％の生徒が肯定的に回答した。また，肯定的及び否定的に回答した生徒の多くが書く活動の有用性を実感していることから，英語を書く機会を設定することの重要性が感じられる。

協力教員を対象にした記述による事後アンケート調査でも，「複数の領域を統合した言語活動を意識して授業づくりに取り組むようになった。」「本文内容に対する生徒の理解を更に深めることを意識できた。」と肯定的な意見が見られた。

以上のことから，聞いたり読んだりする受容的な技能と，それらを話したり書いたりする発信的な技能を一体的に育成することの重要性を改めて実感し，複数の領域を統合した言語活動の有効性を確認することができた。また，教員の授業づくりに対する意識が変容し，授業改善に向けて意欲が向上したことも成果として捉えることができる。

４　今後に向けて

本研究の結果から，Small Talk 及び複数の領域を統合した言語活動の有効性の一端をうかがうことができた。しかしながら，課題とされる Small Talk の効率化や即興的にやり取りする力及び言語材料の確実な定着については，今後も指導の工夫や改善が必要である。

Small Talk の効率化については，継続して行い，生徒が円滑に取り組めるように配慮すること，また，本時の主たる言語活動と組み合わせることで，更なる効率化を図ること等が考えられる。

即興的にやり取りする力の定着については，活動を習慣化し，英語での対話の機会を最大限に確保することが重要であると考える。また，指導者が生徒の応答に対してコメントをするだけで終わるのではなく，内容に関連した質問を行い，会話を継続・発展させる方法を用いて，やり取りのモデルになることなども考えられる。そうすることで，授業全体がコミュニケーションの場となり，生徒がより多くの生きた英語を用いる機会が増えるため，授業改善につなげることができる。

言語材料の確実な定着においては，平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の報告書では，以下のように示されている。

> 言語材料の定着を図るためには，実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動を行うことが最も重要である。一方で，そのような活動を行うに当たり，それを支える言語材料についての理解や練習も十分に行っていく必要がある。（中略）「言語活動」と「理解や練習のための指導」の両者をバランス及び実施順序等を工夫した実践を行うことが大切である。（※17）

また，同調査結果を踏まえた授業アイディア例では，以下の事項が指導改善や活用のポイントとして提案されている。

> 言語の正確さを高めるためには，ある程度時間が必要であることに留意して，何度も様々な場面で既習表現に触れたり考えたりする機会を設け，「最終的に身に付けていく」というスタンスで長期的に繰り返し指導することが大切である。（※18）

つまり，「言語活動」と「理解や練習のための指導」の両者を授業の中で効果的に行うことで，実際に言語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合う対話的な言語活動を充実させることが求められている。また，相手に正しく伝わるように生徒自身が誤りに気付き，修正を加えながら正確さを高められることにも留意する。

最後に，**図 12** 及び**図 13** を参考に，即興的なやり取りや複数の領域を統合した言語活動と，生徒の英語に対する意識の関連性について述べる。

図 12 は研究協力教員の所属中学校８校の生徒を対象に行った事前・事後アンケート**「英語の授業の中で楽しいと思うことはどのようなことですか」**の結果を比較したものである。事後では，**項目７**以外の全ての項目で増加が見られ，回答総数も 130 以上の伸びが見られた。研究会での取組を通して，生徒の英語の授業に対する姿勢が前向きなものになっていることがうかがえる。また，**「３英語で会話をすること」「５英語で友達や先生などの人の意見を聞くこと」「９英語で自分の事や意見を言うこと」**の選択項目で，20 ポイント以上の増加が見られることから，対話的な言語活動の充実が大きく作用していることが考えられる。

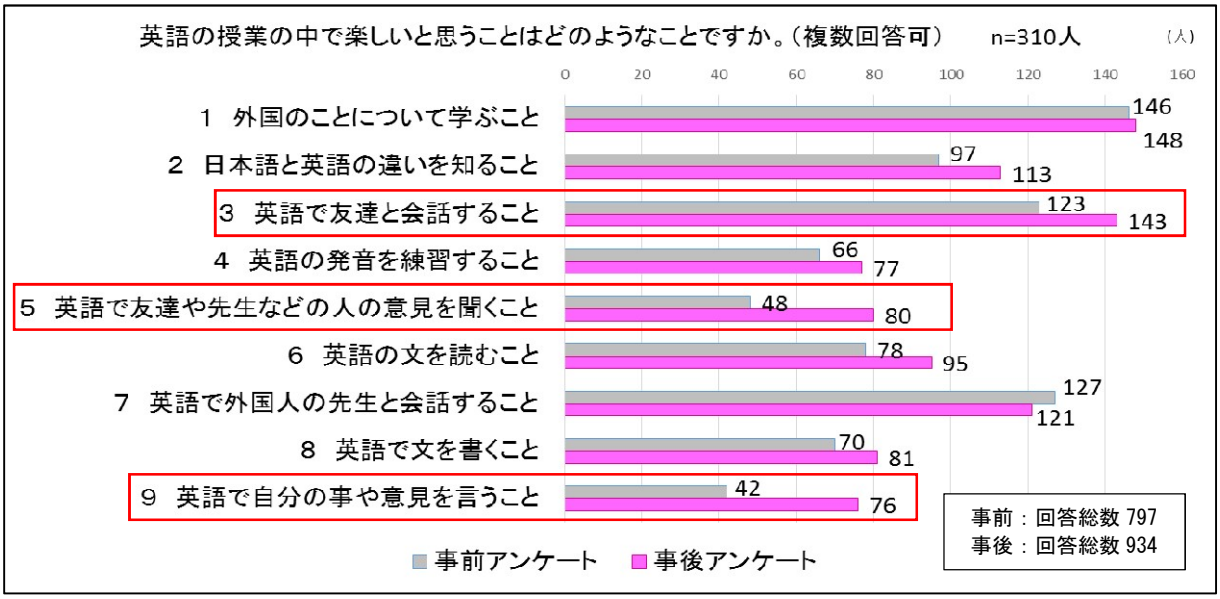


図 12　生徒対象の事前・事後アンケート比較

平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果（概要）における「話すこと（やり取り）」及び「技能統合」の**［言語活動の実施状況］**と**［英語の勉強が好き］**という質問に対するクロス分析の結果（図 13）では，「即興で自分の考えを英語で伝え合う言語活動や，聞いたり読んだりした内容について英語で書いてまとめたり自分の考えを書いたりする言語活動を行っている学校と行っていない学校では，『英語の勉強が好き』という生徒の割合に２倍以上の大きな差が出ている。」（※19）と述べられている。また，「技能統合の言語活動についても，こうした言語活動を行っている学校の方が当該領域の平均正答率が高い」（※20）と述べられている。

以上のことから，即興で自分の考えを英語で伝え合う言語活動や，技能統合の言語活動は，英語に対する興味・関心を高めるきっかけとなり，英語力の向上につながることが読み取れる。

今後においては，Small Talk を始めとする「やり取り」・「即興性」を意識した言語活動及び複数の領域を統合した言語活動等を継続的に行い，言語活動のより一層の充実を図る必要がある。加えて，コミュニケーションの目的や場面，状況等を意識し，言語の背景や文化等に配慮し，互いに考えを伝え合うことができるような生徒の育成をめざしていきたい。

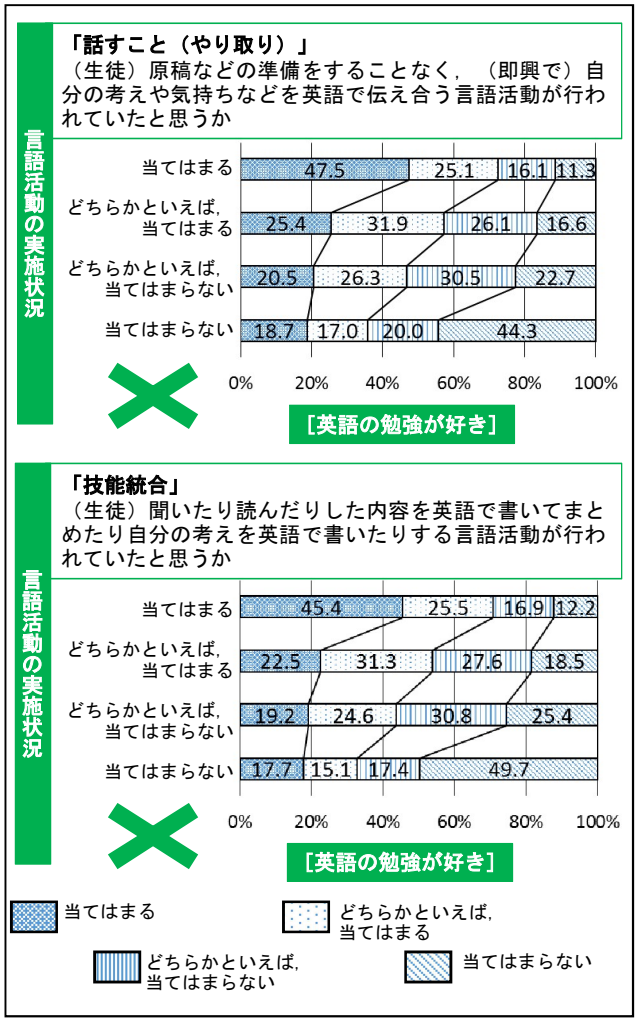


図 13　クロス分析の結果（※21）
（整理して作成）

謝辞：本研究の実施に当たり，多大な御理解・御協力をいただきました田辺市教育委員会の皆様には，この場をお借りして感謝申し上げます。

＜引用文献＞
※１　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年　告示）解説外国語編』開隆堂出版 p.6（2018）
※２　同上資料 pp.7-9（2018）
※３　同上資料 p.10（2018）
※４　同上資料 p.7（2018）
※５　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年 告示）解説総則編』東山書 p.23 （2018）
※６　文部科学省　国立教育政策研究所「平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書 中学校英語」 p.8 （2019）
※７　文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」 p.130（2017）
※８　山田誠志　編著『自分の本当の気持ちを「考えながら話す」小学校英語授業－使いながら身に付ける英語教育の実現－』日本標準 p.39（2018）
※９　文部科学省「中学校外国語科の移行期間における指導資料」（2019）
※10　同上資料
※11　和泉伸一「大学入試改革から見える英語授業への挑戦」『教室の窓　2018.9 vol. 55』東京書籍 pp.20-21（2018）
※12　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年　告示）解説外国語編』開隆堂出版 p.61（2018）
※13　文部科学省「小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック」 p.84（2017）
※14　文部科学省『高等学校学習指導要領（平成 30 年告示）解説外国語編　英語編』開隆堂出版 p.13（2019）
※15　文部科学省『中学校学習指導要領（平成 29 年　告示）解説外国語編』開隆堂出版 p.58（2018）
※16　同上資料 p.57, 60, 63, 65, 68（2018）
※17　文部科学省　国立教育政策研究所「平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査報告書　中学校英語」 p.9 （2019）
※18　国立教育政策研究所教育課程研究センター『平成 31 年度（令和元年度）全国学力・学習状況調査の結果を踏まえた授業アイディア例　中学校』 p.20（2019）
※19　文部科学省「平成 31 年度（令和元年度） 全国学力・学習状況調査の結果（概要）」 p.18（2019）
※20　同上資料 p.21（2019）
※21　同上資料 p.18（2019）

＜参考文献＞
・Krashen, S (1982). Principles and practice in second language acquisition. Oxford : Pergamon.
・Long, M. (1996). The role of the linguistic environment in second language acquisition. In W. Ritchie & T.K.Bhatia (Eds.), Handbook of second language acquisition (pp.413-468). New York：Acadeic Press.
・白井恭弘『外国語学習の科学―第二言語習得論とは何か』(2008)
・廣森友人『英語学習のメカニズム―第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』大修館書店(2015)
・和泉伸一『第２言語習得と母語習得から「言葉の学び」を考える』アルク(2016)
・東京書籍『NEW HORIZON Eglish Course 1』(2017)
・東京書籍『NEW HORIZON Eglish Course 2』(2017)
・東京書籍『NEW HORIZON Eglish Course 3』(2017)
・門田修平　編著『外国語を話せるようになるしくみ　シャドーイングが言語習得を促進するメカニズム』SB クリエイティブ(2018)
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説外国語活動・外国語編』開隆堂出版(2018)
・金谷憲　監修『英語スピーキング力はどう伸びるのか－高校３年間のテスト調査結果－』アルク(2019)
・文部科学省『初等教育資料 2019 年１月号 No.976』東洋館出版社(2019)